

## 患者さんとのつながりを 決して断ち切らず、治療継続を促す

2014年2月取材

愛知県大府市  
早川クリニック 院長  
早川 聡実 先生

昭和40年代に開業した実父の診療所『板谷耳鼻科内科医院』を引き継ぐ形で、ご主人と共にクリニックを開院した早川聡実先生は、専門である糖尿病診療をはじめ、小児診療を含む内科全般に幅広く対応し、他の医療機関との連携を密にして地域の人々の健康を支え続けています。

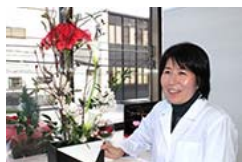
### 二人三脚で開業医の道へ

耳鼻咽喉科医である父親の姿を見ながら育った早川先生は、医師を志した時から、診療のスペンが比較的短い耳鼻咽喉科より、患者さんと長く付き合い、じっくり診療を行うスタイルが自分には合っていると考えていたそうです。大学で代謝内分泌領域を専門に選んだのもこのためです。その後、大学院および病院勤務において糖尿病の研究と診療に携わり、2001年に耳鼻咽喉科医のご主人、早川和喜先生と共に早川クリニックを開院しました。2013年からは、1階が和喜先生の「はやかわ耳鼻咽喉科クリニック」、2階が聡実先生の「早川クリニック」とそれぞれ独立し、現在に至ります。約3分の1が小児患者であるのも特徴の一つであり、これは耳鼻咽喉科との連携のためばかりでなく、自身が母親という立場からも、乳児検診などを充実させたいという意向を反映したものです。



改装から約1年を経た待合室は、鮮やかな色調の椅子を配置した明るい雰囲気です。

### 通院を促す雰囲気づくり



「このスペースに花があつたらいいなと思って」と、早川先生は自身の生け花教室での作品を窓辺に飾り、患者さんに安らぎを届けています。

専門である糖尿病診療について早川先生は、「患者さんは初めて糖尿病と診断された時には病気をきちんと受け止めますし、指導内容も守りやすいですから、できるだけ丁寧な診療を行います」と、初診での対応が肝心であると考えます。最初は1週間に1回の通院を促し、血糖値などの検査をきめ細かく実施。その後、状態が落ち着けば通院サイクルを長くしますが、その際に重視しているのは通院しやすい雰囲気づくりです。「治療の中断により合併症が進み、脚を切断したり、透析に至る患者さんを多く見してきました。とにかく継続して受診してもらえるよう気を付けています」と早川先生。血糖コントロールが悪化しても怒らない、2〜3か月に1回でもいいから必ず来るように伝えるなど、患者さんとのつながりを断ち切らないことを心掛けています。

### 互いに協力し合う連携体制

地域での連携が話題に上ると、「知多郡医師会の先生方はみんな仲が良く、いつも助けていただき感謝しています」と早川先生は顔をほころばせます。糖尿病合併症の関連だけでなく、消化器検査の依頼や心療内科への紹介といった診療連携が活発であり、同じ内科同士でも、お互いの休診日にはインフルエンザなど急患の診療をフォローし合う関係も築かれています。早川先生は地域一体として取り組むプライマリ・ケアの中で、さらに住民の健康に寄与していくため、今後は午後休診の時間を利用した特定保健指導にも力を入れていきたいと考えています。「患者さんの訴えには、医療従事者としてできる限りのアドバイスをしていきたい」との思いとともに、患者さんを優しく迎え入れるクリニックの活動はさらに広がっていくことでしょう。



待合室には大人と子ども向け、それぞれの書籍や雑誌が充実。「みんなに本を読んでほしい」という早川先生の思いが込められています。